

第11回講座

従業員の力再開に必須

伝統芸能地域の支えに

行場商店社長 高橋 正直さん

浪板虎舞保存会会長 小野寺優一さん

311 伝える／備える

第2期

若者が東日本大震災で起きたことに向き合う通年講座「311」伝える／備える「次世代塾」第2期の第11回講座が15日、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。

今回から復興期を扱う第3フェーズに入り、テーマは「なりわい・地域再生」。

宮城県南三陸町の水産加工会社「行場商店」社長の高橋正直さん(57)、気仙沼市の「浪板虎舞保存会」会長の小野寺優一さん(77)の2人が講師を務めた。

サケ・マスの加工を主事業とする行場商店は、2011年3月の震災で志津川湾に面する第1、第2工場が全壊した。高台にあった冷凍倉庫は残ったが被害総額は約10億円にも上った。

高橋さんは「冷凍倉庫も若者が東日本大震災で起きたことながら、従業員70人が全員無事だったことで3月中には事業継続を決められた。家族の後押しも大きかった」と振り返った。

8月に第1工場、翌年5月には第2工場も新築し、操業を完全に再開。「販路を維持するため、とにかく早く再開したかった」と強調した高橋さんは「操業再開には従業員が欠かせない。犠牲が出ていたら再生できなかった」と語った。

企業地震保険やグループ化補助金制度にも言及し、「大変救われた仕組みだが、補助金は慌てて整備された。災害後の再生支援に向けた事前の議論が必要だったのではないか」と訴えた。

2人目の小野寺さんは冒頭、気仙沼市浪板地区に約300年前から伝わる伝統

芸能「虎舞」について解説。「虎舞は地区全体で保存に取り組んでいたが、震災で地区は壊滅、住民約30人も犠牲となり、虎舞も存続が危ぶまれた」と話した。

しかし、震災から2カ月後、米国の高校からの支援をきっかけに保存会は活動を再開。小野寺さんは「その後、各地へ遠征したが、まだ浪板は地獄のような有様。批判もあった。だが、まずは自分たちが元気になるという呼び掛けに、子どもをはじめみんなが応援してくれた」と涙ぐんだ。

「虎舞という伝統芸能が浪板の連帯と協調を培った」と力を込めた小野寺さん

事前に法整備を

人と人のつながりで信頼関係が生まれ、それが災害から立ち上がる原動力にもなると感じました。自然災

人の思い不可欠

限の責務です。伝統芸能の「人をつなげる力」も実感しました。地元を知り、地域の活性化に貢献したい。

若者の力が必要

地域再生には若者の力が必要だと学びました。伝統芸能はSNS(会員制交流サイト)を使って発信すれば、より浸透するだろう。災害を防ぐだけでなく、被害をどれだけ減らせるかも考えたいです。(仙台市若林区・東北工業大2年・安田琉来さん・20歳)



震災翌年の初舞奉納で勇壮に演じられた浪板虎舞
2012年1月15日、気仙沼市の飯綱神社

受講生の声



メモ 311「伝える／備える」次世代塾を運営する「311次世代塾推進協議会」の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。協議会事務局は河北新報社防災・教育室=メール jisedai@po.kahoku.co.jp